

「じゃあ今から二時間と言うことで、良いんだよね？」

貴ちゃんの言葉に、私は深く頷いた。

「うん、良いよ・・・絶対別れてみせるからね」

「別れてみせる」という私の言葉に、貴ちゃんは辛そうに眉を潜めてグツと息を詰めた。

「ッ・・・言っとくけど、望結のことイカせる度に「何でもします券」貰う約束してんのも忘れてないよな？」

貴ちゃんの眼は真剣そのものだ。しかし・・・

「忘れては無いけど、でも童貞の貴ちゃんにそんなテクある訳無いじゃん！」

私は童貞にイカされるつもりなんて、更々無かった。

「ッ！望結だって・・・は、初めての癖に！」

「初めて」って言うだけでも顔真っ赤にしてる癖に強がっちゃって・・・何でも良いからもう始めようよ」

自分で言うのもなんだが、私は性欲が強い。処女だというのに、生理前にはムラムラして、エッチな妄想ばかりしてしまう。漫画に出てくるような破廉恥な事をしたくて、身体が疼いてしまうのだ。それなのに、それなのに！

この保育園からの幼馴染で、高校の時に初カレになった貴ちゃんは、めちゃくちゃに奥手なのだ！それでもまだ高校生の時には私も恥じらいがあり、中々そういう欲求がある事を話せなかった。物心がつく前から知っているし、友達付き合いの延長のような関係だったのも大きい。

でも！でも！私達もう大学生！貴ちゃんの事は今でも大好きだけど、正直やりたい盛りなのよ！殆ど同棲状態と言っても良い程に家に入り浸っているというのに、手を繋ぐ止まり！こんなに近くに、いつでもタッチオンな合法ちゃんちんがあるというのに、指一本触れることが出来ない状況には、正直もう耐えられない。

浮気は論外だから、私は意を決して貴ちゃんに直談判することにした。正々堂々と「セックスしないなら別れる」と言ったのだ。でもそんな私に貴ちゃんは「大学卒業したら結婚するつもりだからそれまで待って欲しい」とか言い出して、二人の想いが平行線すぎて、結局埒

があかなかった。

別れ話は長時間に及び、そして話し合いの結果が・・・

「イキ我慢」

私のことをイカせられたら貴ちゃんの勝ち。別れないし、イカせた分だけ貴ちゃんの願いが叶う。でもイカせられなかったら私の勝ち、そのままお別れしてすぐに新たな出会いを探す。今思い返せば堂々巡りを繰り返して、二人とも頭回ってなかったと思う。でもまあ生理前でもなくてもなくムラムラしてたつてもあったし、手を出してくれるんなら、正直もう何でも良かった。

「じゃあ準備するから、ちょっと待ってて」

貴ちゃんは床に座り込むと、近くにあった棚から徐ろに爪切りを取り出して、ゴミ箱の上で爪を切りながら私を見上げてきた。

「望結は準備とかしないの？」

言われてから傍と気付いた。今身に付けている下着が全く可愛くなかったことに。

「ッ！じゃ、じゃあ・・・ちょっと・・・シャワー浴びてくるー！！」

お別れするか否かという瀬戸際だが、それでも恋人との初めてのエッチな行為なのだ。万全を期したいという乙女心である。私はバタバタと部屋を後にした。そして大急ぎで寝室に戻り、クロゼットの奥に眠り続けていた勝負下着を引っ張り出した。

薄い水色のレースが沢山着いたフリフリで可愛いデザインのパジャマと、ほぼ紐な紐パン。うーん、改めて見たら本当に紐！

「ッ、あった！これ、高かったのに、結局一回も着る機会が無かったやつ！」

私はようやく日の目を見る事になった下着達を小脇に抱えて、お風呂場へと走った。

「貴ちゃん待ってて！手を出さずには居られないほどメロメロにしてやるんだからー！」

・・・

・・・・・・・・・・

半身浴やパック、秘蔵の美容液などでこれでもかと自分を磨き上げてお風呂から出ると、そこにはソファでうたた寝をしている貴ちゃんがいた。

「ッ！ちょっと！？今から大事な勝負だつていうのによく寝てられるわね・・・！？」

ほったたをツンツン突きながら起こすと、寝ぼけ眼の貴ちゃんがアクビをしながら起き上がった。

「ん？あー・・・ふぁー・・・？ああ、ごめんごめん。だつて望結、全然上がってこないから・・・ッて！？な、なんだよその格好はっ・・・！？」

リンゴよりももっと真っ赤になった貴ちゃんが、手で顔を覆い隠しながら大きな声を出す。私は先程引っぱりだしてきたベビードールを身に着けている。そして我ながら破廉恥極まりない身体を見せ付けるように尻が強調されるポーズを決めた。羞恥心はあるにはあるけど、貴ちゃんの方が照れてるので、思っていたよりは恥ずかしくない。

「言っとくけど私の事をイカせられなかったら、この下着着けて他の男の子とデート行くから！」

それは私に取っては本当に軽い一言だった。冗談の延長、みたいな？奥手な貴ちゃんをちょっと煽ってみようと思っただけ。でも、深く考えずに放ったその一言であんな事になるなんて、思いもなかった・・・。

・・・

・・・・・・

・・・・・・

「なあ、今、何回目？」

貴ちゃんの頭が再び脚の間へと落ちていき、ピチャピチャッといういやらしく湿った音が部屋に響き始める。

「イツ・・・ウウー・・・ッ！わ、かなな・・・ああっ・・・だめっ！またキチャ・・・きもちッ、の、きちや・・・アううグッ♡♡♡」

ビクビクと身体を痙攣させた私は、貴ちゃんの舌から逃れようと必死で手を伸ばして頭を押し退けようとした。しかし貴ちゃんは私の太腿を抱え込む手にグッと力を入れて、更にもう舌を舐め込んでこようにする。

「七回目だよ？俺の願い事がかかってるんだから、ちゃんと数えとけよ」

ーずちゅり♡

「あああっ・・・！やめ・・・！もっ、ヤダあっ・・・ヤッ！そんな、しな、でっ・・・！ペロペロしな、でえええ・・・」

熱い舌で執拗に解された蜜壺を舌でずちゅずちゅと小突かれれば、その堪らない愉悅に情けなく咽び泣くことしか出来ない。腰から下が溶けてしまうかのような快楽が延々と続き、そして再びビクン！と腰を震わせて深い絶頂を迎えると、貴ちゃんは冷たい視線を向けてくる。

「今ので八回目ね？」

私のはしたない体液で汚れた口元を手の甲でグイ、と拭いながら、ソファにグッタリと身を投げ出す私のことを恐ろしい程に冷めた眼で見下ろしてくる。

「ねえ、尻の穴まで痙攣してるけど、こんな身体でどこ行くって？」

大きく開かれた脚の間、太腿の付け根からグイッと大きな手で掴まれて左右に割開くように広げられると、新たな蜜がこぶりと溢れ臀部を伝い落ちてしまった。

「こんなドロドロの身体で他の男とデート？望結は自分がどれだけ無防備なのか、分かっただけだよな」

零れ落ちた蜜をべろりと舐め取られ、そのまま舌でズチュリと元の場所へと戻された。

「くうう・・・うんっ・・・」

「クリだってこんなパンパンに勃起させてさ？ほら、これ。恥ずかしくないの？」

指でグツと皮を押さえられると、中から神経剥き出しになった弱々しいクリトリスがチョンと顔を出す。冷たい空気に晒されたそこは、フルフルと震えている。

「ヤッ・・・やめて・・・お願い、貴ちゃん！」

恐ろしい予感がして、ジワリと浮かんだ涙を目に溜めながら、首を左右に振ってイヤイヤと意思表示するが、しかし貴ちゃんはベーツと舌を大きく出すと、見せ付けるようにべろりと舌を這わせてきた。

「や・・・！やだ・・・！あっ！あ、ああーっ！っ！」

ぬるぬるの熱い舌がクリトリスの上に固定されたまま、上下左右に激しく動かされ、私は悲鳴のような嬌声を上げながら太腿を強張らせた。

「ダメッ！イッちゃう！また、またイク・・・イク・・・イク・・・！イクイクイクイク・・・あああああっ！」

ビクビクツと身体を震わせて、お尻の穴をキュウツと締め付けながら大きな絶頂を迎えると、貴ちゃんはヒクつくクリトリスにデユツ！と強く吸い付いてきた。無理矢理引っ張りだされたそこへ、口に含まれたまま唾液をぬりぬりゆと塗りたくられる。泣きなくなるほど敏感になり、虐められて腫れてしまったそれを今度はデウルデウルツと吸られて、余りに強烈な刺激の数々に私は目の前が真っ白になる。

「ヒッ・・・！あああーっ！っ！いやあーっ！っ！とれ、とれちゃ・・・吸わな、でえ！やめっ・・・やめてえええっ・・・！」

必死で手を伸ばして、貴ちゃんの前髪をグシャグシャにしながら頭を押し退けようとするのだが、顔をブルブルと左右に振りながら吸い付かれ、刺激を一気に強められると、貴ちゃんの頭を太腿で挟み込みながらまたもや派手に絶頂を迎えてしまう。

ハアハアと荒い息をしながら、頭からズルリと落ちるようにして床へと倒れ込むが、未だ貴ちゃんに腰を掴まれている為、下半身はソファへと残ったままだ。繊細なレースのベビードールはその存在が忘れられたかのように半分ほど脱げかけており、ほぼ紐の紐パンは、無惨にもソファの下に投げ捨てられている。

ーっーべろッ

腕を投げ出した状態でグッタリしている私の身体に、また新たな快楽が与えられ始めた。

「ッ！？ひゃ・・・な、なに！？なに！？」

クリトリスをベロベロと舐め回されたかと思えば、もっと　下へと移動していく。尿道をくすぐる様にクリクリと、蜜壺を突くようにグチグチと舌を挿入され、そして、そのままつと下へ・・・

「ヤダッー！そこ！だめ！ヤダッ！」

「うるさいなあ。どこ舐めたって甘い声出して感じまくってる癖に・・・望結エロいこと大好きじゃん」

貴ちゃんは私の腰を抱え直しながら、冷静な瞳で見下ろしてくる。冷たい視線とは反対に、舌だけは熱心にチロチロベロベロと蠢いているので逃げようにも力が入らず、ただブルブルと身体を震わせながら次々と与えられる甘美な快楽に耐えるしかなかった。そして貴ちゃんの舌が辿り着いたのは、最悪の予想通りやっぱりお尻の穴。

ー　ー　チロツ

ひと舐めされただけで、私の身体はドクン、と熱くなった。気付けば私は、無意識の内に酷く甘い声を漏らしていた。

「あっ♡はぁあー・・・♡」

実は、一人でスる時には絶対にアナルを使うほど、最近ハマっていたのだ。しかし流石に、処女の癖にお尻で感じるだなんてバレたくは無かった。でも、今までこっそりと自分の指で弄って自己開発していたそこは、驚くほど感じる性感帯になりさがっていた。

そんな私の反応に、流石の貴ちゃんも驚いた様子を睨み開いていたが、しかしその直後、咎めるように鋭く睨まれた。

「は？何？もしかしてもう誰かに弄られてたり？」

尋問するかのように尖らせた舌でツンツンと突かれ、私は口を大きく開きながら舌を突き出す。イカされ続けた身体はどこもかしこも敏感になっていて、そして最近お気に入りだったそこは特にそうだったから、誤魔化しようが無かった。

「ひいああーっ♡や、ち、違う！そんなこと・・・してないっ・・・！」

羞恥から頬を赤らめてしまうが、すると途端に貴ちゃんの不機嫌さが増した。

「なにその反応・・・凶星？」

私は浮気は絶対に反対派だ。浮気するくらいなら別れる選択をする。だというのに貴ちゃんにそんな疑いをかけられた事が本当に悲しくて、もう泣きたくなってくる。

「・・・してないからね!？」

大きな声で否定したが、でも貴ちゃんは全く信じていないようで、お尻の穴を舌でペロリと舐め上げ、私が気持ち良さそうに喘ぐ姿を確かめている。

「普通さ、初めてでお尻の穴って感じくない？ちょっと舐めただけなのにその反応・・・絶対初めてじゃないだろ」

私はグツと唇を噛み締めながら、涙目で貴ちゃんを睨んだ。

「そんな事言われても、浮気なんて、してないものはしてないし・・・！それに、そこ舐めるの嫌だって言ってるじゃん！」

しかし貴ちゃんは片方の眉をクイと上げながら肩を竦めてみせた。

「はあ？どこが嫌だって？」

「お、お尻の穴・・・！舐めるなんて、汚いでしょ！」

「ハハッ、そんな事言いながら望結も期待してたんじゃないの？こんなにキレイに洗って準備してきてさ？」

貴ちゃんは鼻で笑うと、見せ付けるようにクンクンと匂いを嗅いできた。

「石鹸の匂いするけど」

「そ、そんな訳無いじゃんっ・・・!!」

全身磨き上げたのが仇になった！恥ずかしい事実を指摘されて、思い切り身をよじれば、パツと手を離されてベタン！と床に落ちた。

「ツたあ・・・！もう！何するの！」

しかし起き上がろうと膝をた着いた途端に後ろからふくらはぎを踏まれて、身体を固定されてしまった。

「へ・・・？」

四つん這いのまま、動けなくなった私の後ろから貴ちゃんがお尻をペチンツ！と叩いてくる。

「ヒヤアツ！？な、何？何？何するつもりっ！？」

見えないのが怖くて振り返るが、貴ちゃんは悪い顔でニヤリと笑う。

「えー？何すると思う？」

そして言いながらも先程より少し強めに、パシンツ！とお尻を叩いてきた。

「望結は肌が白いから、すぐ赤くなるな」

叩いたばかりのお尻を今度は手のひらでスリスリと優しく撫でられて、ジンジンしていた肌がぞわりと粟立つ。

「ふゃああっ♡・・・ッ！あ、あの！今のは違う！た、叩かれても痛いだけだから！止めて！」

つつい甘い声が出てしまい、私は慌てて口を塞ぎながら

振り返るが、貴ちゃんは「へえー？」と全く興味のない返事を返してくる。

ーペチンツ！ペチンツ！スリ♡スリ♡

叩いては優しく撫でて、叩いては撫でてを何度も繰り返されて、私は情けなくも息が上がる



ほど感じてしまう。叩かれるのがこんなにも気持ちの良いものだったなんて、知らなかった。

「はうう・・・♡んぐ・・・ううつ♡・・・ヒツ♡・・・あ、ううーっ♡ツ♡」

パチンツ！と一際大きな音がして、大きな衝撃を受けた瞬間、何かが弾ける感覚がした。ビクビクと身体を震わせた私は、そのままクタリと力が抜けてしまった。身体の奥はまだ熱く震えている。

ーっポタポタツ・・・

「????・・・ツ!?や、やだぁ・・・みない、でええっ・・・!」

おしっこを漏らしてしまったかのような感覚に、慌てて手で隠そうとするが、しかしその手はすぐに貴ちゃんに拘束されて、そのまま後ろからジックリと観察されてしまう。

「へえ、これ・・・潮吹き?なんか漏らしてるみたいだな。ってか、叩かれて潮吹きするなんて、望結って虐められるのが気持ち良かったりするんの?」

「そ!そんな事無いからっ!」

貴ちゃんは「フハッ」と吹き出した。いつも通りの、私の好きな笑い方だったけど、それなのに背筋がヒヤリとしたのは何故だろう。

「そんなトロットロの顔して嘘つかなくていいよ。望結の事よく分かってるつもりだったけど、エロい事すると俺の知らない望結がいっぱい出てくるね」

今度は私の知らない冷たい笑顔だった。

「・・・望結ってさっきから嘘ばっかつくじゃん。もういいよ、素直で可愛い身体に聞くから」